

ことはが 劈かれる

思想の科学社

ことはが 劈かれる とき

竹内敏晴

思想の科学社

竹内敏晴（たけうち・としはる）略歴

一九二五年 東京に生まれる。

一九五一年 東京大学文学部卒。

一九七二年 竹内演劇教室開設。

現在 宮城教育大学教授。東京大学教育学部講師。南葛飾高校定時講師。

△主な演出作品▽

福田善之戯曲「長い墓標の列」

宮本研戯曲「明治の樞」「ザ・パイロット」

木下順二戯曲「沖縄」

秋浜悟史戯曲「冬眠まんざい」他

ジュネ戯曲「屏風」

三好十郎戯曲「斬られの仙太」

集団創作「田中正造——谷中村」

△主な論文と著書▽

「歴史と民衆と」（未来社刊『明治の樞』所収）

「中国でみた日本」（『日本読書新聞』一九六二年二月・三月）

「スタニスラフスキー・システムの現代的課題」（『文学』一九六四年二月号）

「演技者は詩人たりうるか」（代々木小劇場刊一九六九年八月）

「仮面とからだ」（『テアトロ』一九七五年八月号）

『劇へ——からだのバイエル』（音雲書房刊）

〈検印省略〉

ことばが劈 ひら かれるとき		著者		発行人		発行所		電話		振替口座		印刷		製本		定価	
◎竹内敏晴		加太こうじ		思想の科学社		東京都文京区後楽二一六一二		〇三一八一三一七四五		東京五十八九〇七二		東京ベル印刷株式会社		豊文社		千三百円	
第一版第一刷発行		第一版第一刷発行		第一版第一刷発行		第一版第一刷発行		第一版第一刷発行		第一版第一刷発行		第一版第一刷発行		第一版第一刷発行		第一版第一刷発行	
一九七五年八月二五日		一九八〇年五月五日		一九八〇年五月五日		一九八〇年五月五日		一九八〇年五月五日		一九八〇年五月五日		一九八〇年五月五日		一九八〇年五月五日		一九八〇年五月五日	
一九八〇年十月二十日		第二版第一刷発行		第二版第一刷発行		第二版第一刷発行		第二版第一刷発行		第二版第一刷発行		第二版第一刷発行		第二版第一刷発行		第二版第一刷発行	

ことばが劈ひらかれるとき

目次

はじめに 7

凍っていたノド——つるまきさちさんの報告 7

からだことば——竹内敏晴の手紙 19

ことばが劈かれるために 26

ことばとの出会い 29

失われたことば 31

発語への身悶え 41

敗戦 51

物語と音への目覚め 58

師・岡倉士朗との出会い 67

他者のまなざし 84

からだとの出会い 91

解体することば 93

野口体操との出会い 99

演技Ⅱ行動するからだ 108

祝祭としてのレッスン 113

弓の修業から…… 117

こえとの出会い…… 123

話しかけのレッスン…… 136

他者との出会い…… 142

治癒としてのレッスン…………… 149

竹内演劇教室のはじまり…… 151

「ふれる」ということ——Sの場合…… 154

吐くということ——Oさんの場合…… 158

引き裂かれたからだ——Nの場合…… 161

こえの治癒——GとSの場合…… 166

対人恐怖について——WとMの場合…… 177

自閉症児とのふれあい——ひろし君の場合…… 135

現代社会とこえの歪み…… 200

明示性と含意性の統一…… 212

からだそだて…………… 219

「体育」を「からだそだて」と読む…… 224

姿勢について…… 228

「からだ」としてのことば…… 240

「からだそだて」の観点から見た全教科のパースペクティブ…… 241

「からだそだて」が目指すもの…… 268

おわりに…… 272

参考文献…… 276

あとがき…… 278

はじめに

はじめにチヨコちゃんのことを語りたい。チヨコちゃんは、いま、新潟県の心身障害児の療育施設に在る小学校六年生である。が、ちょっと見たところ三年生くらいにしか見えない。かの女とのつきあいは、つるまきさんを通して間接に始まった。

凍っていたノド……つるまきさちこさんの報告

チヨコちゃんは、こえは出るけど、ことばにならなかった。「知能指数不明」とされ、発育おくれの子として入学した。

三年生になったとき、チヨコちゃんは私のクラスに移った。へことばこそ不自由でも、毎朝の合同体操のときのからだの動きや昼食ときの表情の豊かさ、反応のしかたなどから見ると、学習能力はそう低くないのではなからうか」と職員の見解が一致して、おくれの軽いほうの子のクラスに編入がえとなったのだった。

一九七二年四月当初のチヨコちゃんは、ほかの子がいちおう話したり書いたりできるなかでは、やはり異質でおくれの多さが目立った。担任の私は、彼女がたまに嬉しそうに話しかけてくれることばをほとんど聞きわけることができない。

さて、どうしたものか。

四月下旬、演出家の竹内敏晴さんと日本語文型教育研究会の菅井建さんとの対談（対人間関係の認識を探る／ことばがひらかれるとき）『思想の科学』七二年七月号）を聞く機会があって、そのときに竹内さんの発声訓練の工夫の話も出た。それで、さっそく教室で応用してみた。

竹内さんもボーランドの鬼才グロトフスキーもそんなやりかたを提示した覚えはないとおっしゃるだろうが、例によって私は向きあっている生徒たちにそくしてつるまき流化するほかはない。

ただ「ア——」とこえを出すだけの稽古なのだが、「正面の黒板を突き通して隣の教室の伊藤先生のおでこにア——のこえをくつつける」という課題が第一。

第二には、「頭の上の蛍光灯に正面を向いたままのア——で届かせる」頭のとっぺんからこえが出ていくようなイメージでの稽古である。

第三は、やはり正面向きのまま、「うしろの壁を突き抜て秋山先生の教室にア——を入れる」つまり、後頭部からこえを届かすようなイメージの練習である。

クラス八人の子どもたちと一緒に私もやってみた。雑念がまじるとこえが空に散る感じだし、子どもたちのこえの出しようも聞きわけられない。いつもずっと「自分以外を教える」ことをしてきたものだから、うんと一心にならないと、「伊藤先生のひたいにア——をくつつける」イメージに自分をまとめられないのだろう。チヨコちゃんの訓練よりも自分の修業がさきだと思った。

こうして「朝の歌」の時間に五、六回稽古したろうか。チヨコちゃんは、はじめは「ア、ア」ととぎれとぎれのこえしか出なかったのが、一回ごとに長く張りのある「ア——」になっていった。

伊藤先生のひたいにピタアッつけよう、と言うと、ニコッとしてまばたきもせず一心にこえを出す。からだじゅうで「伊藤先生のおでこ」に向かっている。

「こんどはどこ？」と聞くと、「ソキ」（電気）と言う。天井の蛍光灯のことを言っているのだ。自分でつぎつぎ課題をきめて、「ア——」と集中する。

クラスでの申し合わせで、日直当番の子は、朝から放課後までの「指示・伝達・司会」をみんなのまえでしなくてはならない。「おはようございます」とか言わなければ、先生は何も始めないから、動きにくい口の子もいやおうなしに話したり問いかけたりするほかになる。みんなは、日直当番のチューリップ型の名札を自分でも何日もつけていたのに、チヨコちゃんの番になると、いく日でも胸につけさせておいてやる。いちばん小柄な幼いチヨコちゃんの「……ツ」とかの号令にも問い返しもせず、澄まして起立する。

こういう雰囲気になんできたのか、チヨコちゃんは、朝からニコニコと号令をかけ、問いかけ、文字を書き、絵を描き、工作をし、手伝いもせさせとして、もともと持っていたエネルギーが外部へ出てきたのか、遊んだりしゃべったり、活発に行動するようになってきた。そして、朝の「ア——」の息の長さ、集中の良さでは、クラスの第一人者になった。

毎朝の「ア——」の稽古にだんだんはつきりとその学習能力を発揮していくチヨコちゃんのことへ予想どおり、力のある子だったとうなずけたのだが、意外なこともあった。

読み書きもでき、ハッキリしたこえでハキハキしゃべれる工夫君が、本気な、くつきりしたこえで

“黒板を突き通す”ことがない。自信なさそうに立って背中もしゃんとしないし、目が宙を泳ぐ。ほかの子も、はじめ少々とまどったのだが、数回の稽古でつきつき自分なりの集中ができるようになったのに、クラスのなかでは知能の高いリーダー格のT夫君が低迷しつづける。一見、かなり能力もありそうなおしゃべり屋さんのT夫君が？ と私は気になった。

ほかのもう少しおくれのひどい子どもたちのクラスと一緒に「ア——」の稽古をしたときもそうだった。

(1) 集会室の前面の黒板に向かって「コクバンサ——ン」と呼んで……。返事をするかもしれないよ。よく聞いて。「コクバンサ——ン」。

(2) こんどは、黒板さんと呼ばずに、「ララララ——ン」と、ララで呼ぼう。

「ララララ——ン」返事したかな？

——T夫君は、こえだけは大きく、黒板さアんと出ているのだが、目がうつろで、こえも散ってしまう。へからだ〓ごと黒板にぶつける気になって呼ぶ感じにはならない。ほかの子が、級友の呼びようを見ていて、「呼んだ」「呼ばない」とちゃんと聞きわけるのに、T夫君には、その聞きわけももちろんはつきりとはできない。あいまいにほかの子の挙手をまねたりしている。——

(3) じゃ、こんどはうしろ見て。

何がある？ はきもの棚？ 棚に何がある？ 長靴ね。ちょっと見てきて。(子どもたちは、わいわい長靴にさわってみたり、足を入れる穴をのぞいたりしてくる。)

あの長靴さんと呼んでみようよ。

「ナガグツサ——ン！」 返事したかな？ もう一度呼んでみようか。スポーンとこえが入るよ。

「ナガグツサ——ン！」

(4) では、黒板に向いて。こここのうしろの頭のところからビューン。長靴さアんってうしろから長靴の中に入れようよ。「ナガグツサ——ン！」

(5) こんどはララでね。

「ララララ——ン！」

チヨコちゃんたちは、新しい課題が出るたび、パッと顔をほころばせては全身でこえを出す。T夫君はソワついてさっぱり本気になれないでいる。彼よりもおくれのひどい子が楽しそうにフィクシヨンの世界で遊んでいるのに、T夫君は、無心になれず、遊べないらしい。

なまじ考える力が少々あるから、へそんなバカな。こえが長靴のなかに入るか！とこだわっているのか、そのこだわりが集中を妨げているのか。

「伊藤先生のおでこよ。見てくる？」「ん」彼はてれながらも隣へ見に行く。(伊藤先生の教室、毎朝どうもおやかましゅう)見てきて、少しイキイキした目つきになって、「ア——」。うん前よりずつと行った、いいね。子どもたちが、少々ハテナ？ と首をかしげながらも、T夫君をいたわって評価すると、彼は、すこしうれしそうだけれども、ほかの子の発声ぶりにはおよばないと彼自身感じているらしく、すぐ困った表情になる。

演劇クラブや自治活動の場などでこれに似たことによく出会った。いわゆるデキルほうの子が、チヨコちゃんのように「全身で集中することや」「自分の中からのイメージ・実感にしたがって正直に

ふるまう”ことがなかなかできない。言語系の発達やペーパーテストの点の良さがかならずしもヘイメージを湧き出させ、表現する能力にはつながらないで、〈頭の皮〉のところだけで考え、処理するりこうさにとどまっている。

私が教師としてずっとしてきたことも、〈頭の皮で考える〉どまりの教化作業であった面が多いのではなからうか。それは、〈りこうさ〉はつけなくても、〈自身の実力としての賢さ〉を育てることとは別だったろう。T夫君がひとごとには思えなかったし、〈ことばの力をつける、伸ばす〉ことは本質的にはどうなることなのか、あらためて考えさせられた。

夏のある朝、チヨコちゃんがあんまりきれいに「ア——」とこえを出すから、いつもみんなで歌う「アイウエオの歌」ももう歌えるかなと思いついた。

「ア——サ——ヒ——ガ、ア——カ——ル——イを歌って」と言ったら、とたんにカスレごえになって、「アッイッ」とどぎれてしまう。ア——は？ と急いでもどしたら、これはすぐ「ア——」と大きく長く出る。うん、そのこえでね。「ア——サ——ヒ——ガ」と歌わせようとすると、「アッイッ」とどぎれる。何回くり返しても「ア——」のきれいさと、「アイウエオの歌」とがつながらない。はて、どうしたことか。

チヨコちゃんのノドは、「乳児期の病弱などからきた発育おくれが発語にも響いたためで、現在では器質的には異常は認められない。不自然なこえの出し方を覚えたことも、そのうちになおるのを待つほかない」と大学付属病院での診断も出ている。おかあさんの話では、〈大家族内の嫁として身の

ちぢむ思いのなかで育てたことがこの子に響いたのだ。そうだが、無心な乳児期に全身に受けた脅えがノドを凍らせてしまったということはあるのだろう。おとなたちの話はすべて聞きわけられるのだから、もう少し少々息つきとかこえの出し方とかが身につきさえすれば、話ができる「敏感さん」なのだ。おうちでも、「もう一度言って……」などと問い返されればビタリと凍りついて言わなくなってしまうそうだ。

さて、どうしたらいいのだろう。

ことばの指導では、生徒たちの中かなりの実績をつんできてウデがあるほうのつもりでいた。それなのにチョコちゃんの場合には歯が立たない。「その教育の内容・教材・方法がほんものかどうかの確かさは、おくれた子がリトマス試験紙のように証明してくれる」とすると、私のウデはまだ根源的な指導の力量ではなかったのか。

下手な考え休むに似たりと思って、その晩、竹内さんの演劇教室に電話した。

「“アサヒが明るい” などというのはチョコちゃんにはなんの切実さもないことで、へからだ」の中に動いてくるものが何もないわけでしょう。その子がイキイキとイメージできることでなかったら、ことばとしてこえは出てこないのが当然……」

「……隣の教室の先生のひたいにくっつけよう」、それでチョコちゃんは全身が黒板の向こうに飛んでいった。かの女は大きなこえを届けようとしたのではない。へからだ（心）を劈いて先生のひたいに着いた。それをまわりでは「こえが出た」と見た。

ところが、「アイウエオの歌」はかの女にとってなんの欲求も持てない。へからだを投げかけてい

く理由がない。こえが出ないのではなく、実に正直にへからだ」が動かないのだから……」

聞いてみれば当然のことなのだった。私自身同じような経験をくり返している。組合の大会などで思わずマイクなしで発言して、それがかなり聞こえるこえになっていたり、確かにイメージや欲求が基底になくては「こえ」は出ない。(しかたなしにお義理で話す人のこえのうつろさとか、とおりの悪さなどもこれで説明がつく。)

おかげで少し見えてきた。

ちょうど村祭りのあとで、タイコを聞いたり見たりしたばかりだったから、「タイコの歌」をクラスで歌うことにした。

自分がタイコのつもりで、「大きなタイコはドーンドン」と叩く。「小さなタイコはトントントン」と、ミナコちゃんが小さく胸のあたりを指で打つのを見習って、そこところはみんなが軽く小さく歌った。新しい歌を習うとすぐ自分流に身ぶりをつけて歌うくせのついているみんなだから、「タイコ」はお気に入りパーティリになったようだ。イスの上にあがって歌い、机の上に立って歌い、熱中した。

十日ほどして、一人ずつで歌ったとき、チヨコちゃんも、「オーターコ、ドーンドン」とにこにこ歌った。

春五月の参観日には(五月前半は寮舎災害の都合で全員帰宅していたのだが)、おかあさんが、「チヨコがいっぱいしゃべるようになって……」と変化を話してくださいだったものの、正直のところ私には判断のつかない発語のままだった。それが、「タイコの歌」以来ときどき明瞭に発音するようになった。